

## JBL4350A 奮闘記(5) —アナログ再生系の進展—

### 1. 始めに

前報(4)までのアンプの選択に引き続き、音楽信号を送り込む入力系の経過について報告いたします。まずは、アナログ再生系の経過から報告いたします。

### 2. アナログ再生系

既存のアナログ再生系の機器については、編集者 Profile のページのオーディオ機器リストに示されたとおりですが、ここでは過去に使用したものも含めて述べてみます。最初に購入したのは Pioneer のベルトドライブの PL-61 (写真) です。続いてサブシステム用に Technics の SL-10 (写真) を購入しました。PL-61 が故障したのを機会に、当時盛んに用いられるようになった DD 方式の Victor の TT-81 (写真) を大阪ケーブルの Lead Console (写真) にマウントし、FR のダイナミックバランス型の FR-64S と SAEC のナイフエッジ型の WE-308SX をマウントして本格的にアナログを楽しむシステムが完成しました。しかし、WE-308SX はそのクリティカルな調整と音に馴染めなかったことからオイルダンピング方式の AC-300Mark II に交換してこの状態で長く続けました。



アナログを始めてからこのかた時間と手間をかけたのは、カートリッジとトランスあるいはヘッドアンプの選択です。現有のものについて編集者 Profile の機器リストにあるとおりですが、いろいろ聴いた結果、カートリッジはオルトフォン系と EMT に絞られてしまいました。トランスについては、EMT XSD-15 用ステップアップトランスの試聴レポートに詳細が記載されています。ヘッドアンプとしては、Mark Levinson JC-1 の他、FET 一石のヘッドアンプを自作したりしました。オーディオ仲間とカートリッジとトランスの鳴き合わせをしたり、自作ヘッドアンプを持ち寄って聴き比べをしたりしたのも懐かしい思い出です。

その後、Garrado 401 を安く手に入れることができ、SME 3012 と組み合わせて二つ目のシステムが完成し、さらにオーバーホールをしたり、周波数制御を兼ねたアイソレーターを入れたり、アームを AC-300Mark II に入れ替え、EMT XSD-15 を主に聴くようにしていましたが、偶然専用トランスの STX-20 を見つけて現在に至っております。この Garrado 401 については、アナログプレイヤーの EMT XSD-15 用ステップアップトランスのページの一連の EMT XSD-15 用ステップアップトランスの試聴レポートに詳細が記載されています。

一方、TT-81 については DD 方式の音が馴染めず、オーディオ人生も限りある年代になってきましたので思い切って LINN の LP12 の導入を決めました。この LP12 については、アナログプレイヤー LP12 のページの一連の LP-12 導入顛末記レポートに詳細が記載されていますのでそちらを参照していただきたいと思います。

フォノイコライザーについては、既に処分した Lux の CL30 と CL36 の他、マッキンの C29、Leak の Point 1、若松通商のマランツ 7 タイプキットなどを経て、しなの音蔵オリジナルプリで落ち着いています。しなの音蔵オリジナルプリ以外は別室や別宅およびサブシステム用に使用されていますが、47 研究所の専用フォノイコ 4718 がメインシステム用に残っています。

### 3. まとめ

JBL4350A の奮闘の歴史の半分はアナログを良く鳴らそうという歴史でもあったわけですが、ここに来て漸くケーブルの交換やクロック品質を向上させたデジタル系の再生とともに満足いく状況になってきました。例えば、Garrado 401 と EMT XSD-15 で聴くアナログは EMT981 で聴く CD と違和感なく交互に鳴らすことができるようになってきました。さらに DSD 再生のために MR2000sBK と DA-3000 が加わりましたので、一層アナログとの距離感が縮まりました。

以上